

が私にはたまらなく美しく見えた。コスモスが揺れたかと思ふとかすかな音を立て、落葉が降つて来た。その時彼は両手をズボンのかくしにおさめて黙つて、乾いてはゐてもどこかに濕つばい匂ひをもつた土を見詰めてはじめた。いつの間にか赤坊も泣き止んだ、隣りのお内儀さんも怒鳴らなくなつた、荷車の音も絶えた。そして静かな沈黙の中には暖かい光線が充ち充ちた。自然は躍つてゐる、十一月の恵まれた光の中に偉大な生命が躍動してゐる！聲なきに聞け、形なきに観よ。

この日、おぼろげながらも三人は自然を観た様に感じた。そしてお互ひの胸は強い喜びに打たれた。間もなく、コスモスの花陰には名ばかりの粗末なテーブルと三つの椅子がから、コスモスの花の蔭から、落葉の音と共に生れ出でた。三人は、我等は、他人の憐みの下に育つてゆかうとするものではないが、然し我等の共鳴者を入々の中に、殊に我等が愛する少年と少女との中に見出すことをこの上もなく心強く感ずるものである。抽象的な言葉をつらぬると思はるかも知れぬが、しばらく我等の主張を聞くだけの好意をもて。

「我等は自然を觀やう。従來我等は我等の周圍に付てあまりに無關心であつた。まるで時計の針の様に置きまりの一日を繰り返してばかりゐた。然しながら今、少しく心して我等の周圍を眺むる時、そこには草があり木があり、又山があり水がある。それ等の凡ては「光」の中に何といふ微妙な調和を作つてゐる

据えられた。そこに一人の少女が可愛い顔を手ばかりしながら、重さうに銀盆を抱えて来た。彼女の瞳と唇とが頬笑みかけたにも拘らず三人は黙つたまゝ熱い茶を啜つた。彼等は言葉を必要としなかつた。たゞ、一人が云つた、「描かう、描かう。」テーブルの上に又一つの枯葉が舞ひ落ちた。銅貨程の大きさをもつた褐色のしなびた葉は、光線の中で或部分は白く又他の部分は黒く浮き出された。一人がそれをそつと掌にのせると皆の前に突き出しながら云つた、「枯れても生命がある！」少女の星の様に美しい瞳が大きくいつばいにひろげられた。

人々よ、かうしてささやかではあるが繪畫を中心とする一つの會が、十一月の陽光の中でして精密に觀察する。

「我等は自然を感じやう。我等によつて注意深く精密に觀察された自然は我等に如何なるひびきを起させるであらうか。傳統的、概念的、情感に捕へらるることさへなければ、我等の情感に種々様々な反響をつたへるであらう。かくして名もない丘も富士山より美しく一握の砂も金剛石より輝くであらう。客觀を主觀によつて淨化するのだ。我等は之を自然生命の體得と云ふ。

「我等は自然を現さう。自然の再現だ。主觀によつて淨化された客觀を繪畫といふ形式に於て現すのだからして、それは乾板を印畫紙に焼き付けるものではない。それは我等の